

家庭科教師の授業力形成に及ぼす研修の質について — インフォーマルな研修の影響を中心に —

Quality of Training Exercise Teaching Ability
of Home Economics teacher:
— Thinking about Effects of Informal Training —

兼 安 章 子 ^{*1}

甲 斐 純 子 ^{*2}

Akiko KANEYASU

Sumiko KAI

^{*1} 福岡教育大学教育学研究科

^{*2} 福岡教育大学

(平成22年9月30日受理)

近年、教師の力量向上が課題となっている。本研究では、授業力形成に不可欠である研修に家庭科教師がどのような形態で参加しているのか、その現状を明らかにする。また、フォーマルな研修、インフォーマルな研修が家庭科教師の授業力形成にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。研究方法は、文献研究、戦前の裁縫科教師と現代の家庭科教師の思考に関する事例研究、中学校家庭科教師への授業力向上に関する質問紙調査を行った。フォーマルな研修については、研修会の出席だけでなく、組織的校内研修の出席、地区研修会の出席が行動・意欲得点を高める要因との関連が見られた。インフォーマルな研修であるサークル活動の経験のある教員は、そうでない教員よりも、フォーマル・インフォーマルな研修に参加している割合が高いことが明らかになった。サークル活動や職場組織による教員間のインフォーマルな研修と力量向上との関係を明らかにすることが課題である。

Key words : 家庭科教師 home economics teacher, 研修 training, フォーマルな研修 formal training, インフォーマルな研修 informal training, 授業力 teaching ability

I. 研究目的

近年、教師の力量向上が課題となっている。1997年に教員の民間研修の制度化、1997～1999年に教育職員養成審議会答申で教職経験者研修についての審議報告、2000年に教育公務員特例法改正で、現職の大学院修学休業、2002年の中教審答申にて教職経験10年者に対する研修の構築の必要性、教育公務員特例法改正にて、10年経験者研修の制度化が明記された。一方、法制度だけではなく、各都道府県の取り組みも強化されている。各研修では、初任者研修や10年経験者研修などの法定研修だけでなく、経過年に応じた研修を充実させている。また、指導力不足として指導されている教員がいる一方、優良教員として表彰されたり、スー

パーティーチャー制度を整備したりする活動も行われている。

また、2007年の教育職員免許法改正では教員の力量向上を目的とした免許更新制が明記された。再び改正される見通しである。教師の多忙化、バーンアウト、精神疾患による長期休職なども問題となっており、現在の勤務に加えて、講習という形による教師の力量向上は最善ではないとも考えられる。

しかし、中学校の家庭科教師は1人教科であることに加え、学級数減少や選択授業の削減に伴う授業時数の減少のために校務負担の増加、あるいは他校との兼任などから校外での研修会への出席や教材研究等の自己学習を積むことが困難な状況

にある。

教師の授業力とは、小山悦二によると技術的側面と人格的側面に大別される。技術的側面を専門的知識・技術、学際的知識・技術、表現能力、専門的ノウハウの整理・蓄積能力から構成される「テクニカル・スキル」、ものの見方や掌握力、知能的側面からなる「コンセプチュアル・スキル」、人格的側面を自立心や共同性といった人間的特質の「狭義のパーソナリティ」、向上心、教育観、心身の健康といった教職を行っていく上での動機づけとなる「モチベーション」の4つに分類した。

また、山崎準二によると、教師の力量形成には研修が大きく関わっていること、さらにインフォーマルな研修や交流の方が、フォーマルなものよりも教師の力量形成により大きく影響することが明らかにされている。フォーマルな研修とは法律上もしくは所属長の命令の基に行なわれる研修である。例えば、管理職の指導助言や校内研修、都道府県主催の研修、初任者研修、10年経験者研修、全校での研究発表、組合活動における研究集会、地区の研修会、長期派遣研修などがあげられる。また、インフォーマルな研修とは、教師がフォーマルな研修とは別に自主的・自律的に行なう研修である。例えば、児童生徒との交流、保護者との交流、年輩教師や同僚のアドバイス、同年代教師との交流、サークル活動、家庭生活などがあげられる。

公的には、教師の授業力を向上させるために、初任者研修や指導力不足教員研修のようにフォーマルな研修が多い。しかし、山崎によると教師の力量形成には、フォーマルよりもインフォーマルな研修の影響が大きいことが明らかにされている。

そこで、本研究では、フォーマルな研修、インフォーマルな研修に家庭科教師がどのような形態で参加しているのか、その現状を明らかにすること、また、それぞれの研修に家庭科教師の授業力形成にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

本研究では、文献研究と事例研究及び質問紙を用いた調査を行なった。

1. 文献研究

教師の授業力形成論について、主に以下の文献を用いて分析を行なった。

(1) 山崎準二らの研究

(2) その他の研究

① 臼井博の研究

② 竹内俊一・高見仁志の研究

2. 事例研究

(1) 戦前の裁縫科教師の力量形成過程の記録から
奈良女子高等師範学校附属小学校の裁縫科訓導、中澤かずめの力量形成過程に関する記録について整理、分析を行なった。

① 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会、『学習研究第二巻前期～第二〇巻』、臨川書店、1977～1978

② 奈良女子大学文学部附属小学校、『わが校五十年の教育』、奈良女子大学文学部附属小学校、1962

(2) 現代の家庭科教師の力量形成過程の記録から
福岡市立I中学校教員兼安章子の力量形成過程に関する記録について整理、分析を行なった。

調査時期：2005年5月～2009年12月

調査方法：学習指導案及び教材、各種研修の分析、学習プリント、メモ、実習日誌の回収

調査内容：学習指導案及び教材、事前・事後の教師の思考、影響を受けたと思われる書籍や言動と各種研修との関係について

3. 質問紙を用いた調査

調査対象：福岡県公立中学校家庭科教105名
回収率45.7%（48人）

調査時期：2009年8～9月

調査内容：家庭科教師の授業力向上とその要因について

III. 結果と考察

1. 文献研究について

山崎準二の論文について分類、分析を行なった結果、教職活動を勧めていく上で基盤を養うことになった大学生活上の事項では、「大学の授業」や「卒論執筆」、「大学教師との交流」のようなフォーマルな営みが低下し、「友人との交流」や「先輩との交流」、「家庭教師の経験」のような課外活動でのインフォーマルな営みの支持率の上昇が認められる。教育実践の質を高める上で最も意義のあったものとして、フォーマルな「所属校での研修」、「学校全体での研究活動・研究体制」、インフォーマルな「先輩・同僚教師の個人的なアドバイス」、「子どもたちとの交流」が多く支持されていた。

初任校時代におけるフォーマルな営み自体においても、研修のカリキュラムとして組み込まれた内容以上に、新任教師が研修の場で同じ新任教師

| 番号 | 年月 | 論文 題名 | ①教師のあり方に関すること | ②教科の専門性に関すること | ③その他 |
|----|---------------------|-----------|--|---|--|
| 1 | 1926年 11月 55号 | 歓喜と努力を見つつ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員は生徒に自信をつけさせるべき。 ・ 伸びようとする指導者は生徒の喜びが自分の喜びである。 ・ 流儀を重んじる人→活用するべき、自分から得ていくべき。 ・ ある人に「自由教材は楽だ」→教師の資格はない。教壇を去るべき。気分が腐っている。 ・ 苦勞して仕上げた生徒の喜ぶ姿が嬉しい。 ・ 努力している生徒の中に入るとき、喜びを感じる。 ・ 教室に入ったとき、裁縫嫌いだった生徒が喜んで質問に来る。些細な心の変化を見ていないといけな。50数名の生徒の内、どこまで進んだか覚えていない生徒には悪かったと思う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 他教科と同じ水平線上に引き上げたい。 ・ 他教科の先生と連絡させたい、興味をわかめたい。 ・ 作り上げさえすればいいという時代があった。生徒を同じ運命にしたい。 ・ 自由材料を選択させる。→生徒の授業外・学校外の生活に浸透・取り除けないものとなった。教室外でも生徒と共にその生活を続けていかなければならない。時の延長が必要。 ・ 小学生でもミシンを使える。使えないという教師がいた。 ・ 自分で工夫・試行錯誤の後が残るノートを大事にするようになった。驚異。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 4月より小学校裁縫担当。 ・ 自らの小学校時代、裁縫が苦手。 ・ 「裁縫教師はひま」といわれる。 |

表1. 中澤かずめ論文（一部）

注) ~~~~~ は生徒の影響に関する記述を、_____ は他の教員の影響に関する記述を示す。

たちと出会い、語り合うことに価値が見出されている。

力量形成上の契機となった事柄では、各年代を通して多いのが、「教育実践上での経験」、「学校内での優れた先輩や指導者との出会い」であり、この2つの項目はインフォーマルな経験の代表であった。

研究指定校制度の浸透によって、9割以上の学校が校内でテーマを持って研究に取り組むようになった。取り組む過程の中で研究はまとめることだけが目的となり、授業研究がおろそかになるという問題を抱えている。

2. 事例研究について

(1) 奈良女子高等師範学校附属小学校の実践

－中澤かずめの裁縫科訓導の実践－

中澤かずめは、奈良女子高等師範学校附属小学校にて、1926年から1942年まで18年間勤務し、裁縫科を担当した教師である。その18年間の実践の記録を分析する。奈良女子高等師範学校附属小学校は、大正自由教育運動のメッカとして学校で組織的に研究を行い、その実践記録を長期間にわたり残している。また、奈良女子高等師範学校の校長・主事であった木下竹次の影響を受けている。

インフォーマルな関係と考えられる生徒や同僚、保護者など他の人物からの影響がわかる記述の回

表2. 中澤の年代別インフォーマルな関係人物との関わりに関する記述回数

| 番号 | 年 | 教員 | 教員以外 | 子ども | 合計 |
|---------------|---------------------|---------------|--------------|---------------|----|
| 1 ～ 5 | 1926年 ～ 1929年 | 6 (54.5%) | 0 (0.0%) | 5 (55.6%) | 11 |
| 6 ～ 12 | 1931年 ～ 1932年 | 6 (40.0%) | 4 (26.7%) | 5 (33.3%) | 15 |
| 13 ～ 24 | 1933年 ～ 1935年 | 8 (40.0%) | 1 (5.0%) | 11 (55.0%) | 20 |
| 25 ～ 35 | 1936年 ～ 1938年 | 5 (35.7%) | 0 (0.0%) | 9 (64.3%) | 14 |
| 36 ～ 50 | 1939年 ～ 1941年 | 8 (80.0%) | 0 (0.0%) | 2 (20.0%) | 10 |
| 合計 | | 33 (47.1%) | 5 (7.1%) | 32 (45.7%) | |

数、内容について分析を行った。フォーマルな研修については、勤務校である奈良女子校等師範学校附属小学校にて、組織的に行われていたが、その研修内容に関する直接的な記述はなかった。中

澤が論文を残した16年間全体では、周囲の大人からの影響を受けたと考えられる記述が38回、子どもに影響を受けたと考えられる記述が32回であった。

また、16年間で3～4年ごとに5つに分け、影響を受けた人物と回数についてまとめた。教員からの影響は、1939年～1941年で80.0%となっているが、大きく影響を受けた木下竹次について論文を書いたためである。子どもからの影響は年代によって変化がないと考えられる。1939年～1941年で少なくなっているのは、戦争の影響で、国家として何を教えるべきかの記述が多くなったためと考えられる。以上のような背景を除けば、中澤は年代や経験年数とは関係なく、常に教員、子どもの両者から影響を受け続けたと考えられる。

(2) 福岡市立 I 中学校の実践

－兼安章子の家庭科教育の実践－

各分野の授業に関して、2005年から2009年までの内容、指導技術等の変化及び、影響したと思われる授業前後の記述から分析を行った。分析対象とする授業は、家庭科各分野からの主要指導項目に関する内容とした。

- ① 献立作成の授業に関して（食分野）
- ② 衣服表示の授業に関して（被服分野）
- ③ 住まいの役割の授業に関して（住分野）
- ④ 幼児の生活習慣形成の授業に関して（保育分野）
- ⑤ 販売方法・支払い方法の授業に関して（家庭生活分野）

食分野の授業では、19回の記述のうち、14回が他の人物から影響を受けた記述であり、全体の次が60.0%の保育分野であった。

また、授業前よりも、授業中・授業後に影響を受ける場合が多く、実際に授業を行い、教師自身が振り返っている際に影響を受けやすいと考えられる。フォーマルな研修による影響は12.9%と少なく、インフォーマルな影響として、他の教員からの影響が61.2%と最も大きく授業に反映されていることが分かった。

中澤、兼安の実践の分析から、その共通点として、授業に対するインフォーマルな影響では他の教員からの影響が大きいことが明らかになった。

3. 質問紙調査について

フォーマルな研修として、組織的校内研修、公開授業、研修会の出席、地区研修会、管理職の助

言、インフォーマルな経験として、サークル経験、相談相手、影響を受けた人物との出会いの有無を年齢や出身大学、家庭科教育歴、専門分野、学校規模、地域、サークル経験の有無、公開授業経験の有無等で分析した。

インフォーマルなものとして生徒と家庭からの影響に関する記述を3点満点で点数化した。

また、研修会への参加とサークルの経験、その参加希望を点数化し、行動得点と意欲得点とした。行動得点は年間の研修会参加回数をそのまま点数とし、サークル経験については10点加点した。これは、サークル活動の多くが毎月行われている場合が多く、長期休み期間を除くと年に10回程度行なわれているからである。意欲得点は、年間の研修会希望参加回数をそのまま点数とし、サークル参加の意思があれば10点加点したものに行動得点を合計したものとした。

(1) 年代別

20代は7人（14.6%）、30代は10人（20.8%）、40代は25人（62.5%）、50代は6人（12.5%）であった。

表3. 年代別研修参加状況

| | 研修 内容 | 20代 (7人) | 30代 (10人) | 40代 (25人) | 50代 (6人) | 全体 (48人) |
|---------------------------------|----------------------|---------------|---------------|----------------|---------------|-------------|
| フ ォ ー ム ル | 組織的 校内研修 | 42.9% (3人) | 80.0% (8人) | 88.0% (22人) | 83.3% (5人) | 79.2% |
| | | * ————— | | | | |
| | 公開授業 | 0.0% (0人) | 60.0% (6人) | 56.0% (14人) | 16.7% (1人) | 43.8% |
| | | * ————— | | | | |
| | 研修会の 出席 | 42.9% (3人) | 90.0% (9人) | 88.0% (22人) | 83.3% (5人) | 81.3% |
| | | * ————— | | | | |
| イ ン フ ォ ー ム ル | 地区 研修会 | 47.1% (4人) | 70.0% (7人) | 56.0% (14人) | 50.0% (3人) | 58.3% |
| | 管理職 の助言 | 42.9% (3人) | 30.0% (3人) | 28.0% (7人) | 16.7% (1人) | 29.2% |
| | サークル 経験 | 14.3% (1人) | 30.0% (3人) | 52.0% (13人) | 16.7% (1人) | 37.5% |
| | 相談相手 | 71.4% (5人) | 80.0% (8人) | 80.0% (20人) | 66.7% (4人) | 77.1% |
| | 影響を受 けた人との 出会い | 85.7% (6人) | 100% (10人) | 76.0% (19人) | 66.7% (4人) | 81.3% |
| | | * ————— | | | | |

組織的校内研修は、20代よりも40代の方が有意に参加が多いことが明らかになった。また、組織的校内研修を経験した年齢では30代が最も多く、研修会の出席でも、20代よりも40代の方が有意に多く出席していることが明らかになった。20代教員の57.1%が正式な教員ではないため、講師よりも正式な教員に対して、研修の機会が多く提供されていると考えられる。

また、公開授業の経験が20代が0.0%であったのに対し、30代は60.0%、40代は56.0%であり、有意に多く経験していることが明らかになった。これは家庭科教育暦の結果とも合った。

(2) 家庭科教育歴別

家庭科の教育歴を10年単位に分けたところ、1～10年が10人（20.8%）、11～20年が18人（37.5%）、21～30年が17人（35.4%）、31～40年が3人（6.3%）であった。

家庭科教育歴別には年代による生徒からの影響に差は見られなかった。一方、家庭生活からの影響については、家庭科教育年数が高くなるにつれて、受ける影響も有意に高くなっていた。このことから、家庭科教育の経験を重ねるにつれて結婚や子育てなどの経験との関連を感じる人が多くなっていると考えられる。例えば、家庭科教育暦が11～40年の教員は子育てと授業の関連に関する記述が多く見られた。

(3) 出身大学及び専攻別参加状況

出身大学別には、教育系が12人（25.0%）、家政系が35人（72.9%）、工学系が1人（2.1%）であった。工業系大学出身の1人は、技術の教員であるが、臨時免許にて家庭科も担当しているという教員であった。

生徒からの影響では教育系大学出身の教員の方が家政系より0.15高くなっていた。

また、家庭生活からの影響は家政系大学出身の教員が教育系大学出身の教員の約2倍となっていた。このことから、教育系大学出身の教員は、生徒から多く影響を受け、家政系大学出身の教員は家庭生活から多く影響を受けていた。教育系大学出身の教員には、小学校の免許を所有している教員が50.0%（6人）いたことから、小学校教員養成課程を卒業し、中学校に勤務している教員も含まれているといえる。その場合、授業を構成する視点が家政学の専門性よりも生徒の興味や言動に置かれていることが多いと考えられる。

(4) サークル経験者の参加状況

サークル経験者は、どの研修にもサークル経験のない者と同じもしくは多く出席していることが明らかとなった。

特に、サークル経験者は研修会の出席が100%であり、有意に高かった。研修に対する意識が高いと考えられる。また、相談相手がいる教員が92.3%、影響を受けた人物との出会いがあった教員が92.3%であり、サークル活動というインフォーマルな研修によって、インフォーマルな人間関係の形成も行われていると考えられる。

表4. サークルの有無による研修参加状況

| | 研修内容 | あり (13人) | なし (35人) | 全体 |
|---------------------------------|------------------|----------------|----------------|-------|
| フ ォ ー マ ル | 組織的校内研修 | 100% (13人) | 71.4% (25人) | 79.2% |
| | 公開授業 | 46.2% (6人) | 42.9% (15人) | 43.8% |
| | 研修会の出席 | 100% (13人) | 77.1% (27人) | 81.3% |
| | | — * — | | |
| | 地区研修会 | 84.6% (11人) | 45.7% (16人) | 58.3% |
| イ ン フ ォ ー マ ル | 管理職の助言 | 30.8% (4人) | 31.4% (11人) | 29.2% |
| | 相談相手 | 92.3% (12人) | 71.4% (25人) | 77.1% |
| | 影響を受けた人 との出会い | 92.3% (12人) | 77.1% (27人) | 81.3% |

(5) 行動・意欲得点の差による参加状況

行動得点について0点、1・2点、3～9点、10～15点、16点以上と分類し分析を行った。

組織的校内研修の経験が0点の教員（50.0%）よりも、10～15点の教員（100.0%）の方が有意に高かった。組織的校内研修を経験することによって、研修へ参加する意義を感じ、校外の研修会へ参加しているのではないかと考えられる。行動得点が1点以上ある教員は、0点である教員より、相談相手がいる傾向にある。また、行動得点が高いほど、多く地区の研修会にも出席していることが明らかになった。

表 5. 行動得点別研修参加状況

| | 研修 内容(点) | 0 (8人) | 1・2 (19人) | 3～9 (6人) | 10～15 (14人) | 16～ (1人) | 全体 |
|---|------------------|---------------|----------------|---------------|----------------|--------------|-------|
| フ ォ ー マ ル | 組織的 校内研修 | 50.0% (4人) | 84.2% (16人) | 83.3% (5人) | 100% (14人) | 0.0% (0人) | 79.2% |
| | | * | | | | | |
| | 公開授業 | 25.0% (2人) | 42.1% (8人) | 84.4% (5人) | 42.9% (6人) | 0.0% (0人) | 43.8% |
| | 地区 研修会 | 50.0% (4人) | 31.6% (6人) | 66.7% (4人) | 85.7% (12人) | 0.0% (0人) | 58.3% |
| | | * * | | | | | |
| イ ン フ ォ ー マ ル | 管理職 の助言 | 75% (6人) | 31.6% (6人) | 33.3% (2人) | 28.6% (4人) | 0.0% (0人) | 29.2% |
| | | | | | | | |
| イ ン フ ォ ー マ ル | 相談相手 | 50.0% (4人) | 73.7% (14人) | 66.7% (4人) | 92.9% (13人) | 100% 0人 | 77.1% |
| | 影響を受けた 人との出会い | 75% (6人) | 73.7% (14人) | 100% (6人) | 85.7% (12人) | 0.0% (0人) | 81.3% |
| 得 点 に 影 響 す る 研 修 | 研修会 の出席 | 0.0% (0人) | 100% (19人) | 100% (6人) | 100% (14人) | 100% (1人) | 81.3% |
| | サークル 経験 | 0.0% (0人) | 0.0% (0人) | 0.0% (0人) | 92.9% (13人) | 0.0% (0人) | 37.5% |

意欲得点が高い教員は、低い教員に比べて有意に地区の研修会に出席しているということが明らかになった。これは、学びの場を求めて地区の研修会に出席していると考えられる。また、サークルを経験したことのある教員の中には、サークルを2つ以上掛け持ちしたいと考えている教員がいることがわかった。組織的校内研修を経験した教員の多くは意欲を高く持つと考えられる。

相談相手がいる、影響を受けた人物がいるといったインフォーマルな経験が多い教員ほど、意欲が高いことがわかった。

(6) サークル経験について

サークル経験者のサークル経験のある教員に、①サークル活動を始めたきっかけ、②参加目的、③人数とその集団、④サークル参加者を仲間と思うか、⑤開催回数、⑥あなたの出席率、⑦時間帯、⑧所属期間、⑨活動場所、⑩活動内容、⑫得たものについて質問した。

サークルでは、ほとんどの教員が誘われて参加するようになり、その後、サークル構成員を仲間ととらえていることがわかった。技術・家庭科研究会や、組合活動から始まったサークルもあった。研修内容は様々で、授業研究だけにとどまらず、調理技術の習得、講師を呼んだ講演会など、形態

表 6. 意欲得点平均別研修参加状況

| | 研修 内容 | 0～5点 (14人) | 6～10点 (9人) | 11～15点 (14人) | 16～20点 (5人) | 21～30点 (7人) | 31点～ (4人) | 全体 |
|---|------------------|----------------|---------------|-----------------|----------------|----------------|---------------|-------|
| フ ォ ー マ ル | 組織的 校内研修 | 64.3% (9人) | 88.9% (8人) | 85.7% (12人) | 100% (5人) | 100% (7人) | 75.0% (3人) | 79.2% |
| | 公開 授業 | 50.0% (7人) | 66.7% (6人) | 35.7% (5人) | 40.0% (2人) | 57.1% (4人) | 25.0% (1人) | 43.8% |
| | 地区 研修会 | 42.9% (6人) | 88.9% (8人) | 35.7% (5人) | 80.0% (4人) | 100% (7人) | 100% (4人) | 43.8% |
| | | * * | | | | | | |
| | 管理職 の助言 | 21.4% (3人) | 22.2% (2人) | 42.9% (6人) | 40.0% (2人) | 42.8% (3人) | 25% (1人) | 29.2% |
| イ ン フ ォ ー マ ル | 相談 相手 | 64.3% (9人) | 77.8% (7人) | 78.6% (11人) | 80.0% (4人) | 100% (7人) | 100% (4人) | 77.1% |
| | 影響を受けた 人との出会い | 57.1% (8人) | 88.9% (8人) | 85.7% (12人) | 100% (5人) | 85.7% (6人) | 100% (4人) | 81.3% |
| 得 点 に 影 響 す る 研 修 | 研修会 の出席 | 78.6% (11人) | 88.9% (8人) | 78.6% (11人) | 80.0% (4人) | 100% (7人) | 100% (4人) | 81.3% |
| | サークル 経験 | 0.0% (0人) | 0.0% (0人) | 64.3% (9人) | 40.0% (2人) | 100% (7人) | 75% (3人) | 37.5% |

も様々であることがわかった。

サークル活動で得たものには、家庭科教師の生き方、教材の活用方法・学習環境の整え方、相談できる仲間、ものの見方、どの教科にも共通する教育の視点の必要性、研究の進め方などがあつた。同教科の教師同士のつながりが出来た、教材研究や指導の向上となった、新任だったので頼もしい相談相手だったなどの感想があつた。

(7) 相談相手について

家庭科の授業について、相談できる相手を持つ教員は、77.1% (37人) であつた。

表 7. サークル活動内容

| 番号 | ① きっかけ | ② 目的 | ③構成人数 メンバー | ④仲間 意識 | ⑤活動 頻度 | ⑥ 出席率 | ⑦ 活動日時 | ⑧ 活動期間 | ⑨ 活動場所 | ⑩ 活動内容 | ⑪ 得たもの |
|----|---------------------|----------------------------|-------------------------------------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------------------|---------------------------|--|
| 1 | 先輩の勧め | 授業内容 充実 | 6～7人 福教祖 | 思う | 年4回 | 100% | 休日 | ～19年3月 | 会員の自宅・ 学校・公共 施設 | 領域別の 内容 | 家庭科教師の 生き方 |
| 2 | 誘い | スキル アップ | 4～5人 G研 | 思う | 週1回 | 100% | 平日昼 | H18～19年度 | 市センター | 消費者教育 | 無記述 |
| 3 | 大学教員・ 同窓生の 誘い | 教材研究 情報交換 | 20人 教員・ 栄養士・フー ドコーディネー ター | 思う | 年4・5 回 | 100% | 休日 | H4～14年 | 公共施設 の実習室 | 教材発掘 | 教材の活用方法・ 学習環境の整え 方 |
| | 校長のす すめ | 研究所 | キャリア教育 についての視 点で複数教科 で教材研究 | 思わな い | 月1～2 回 | 100% | 平日昼 | H20年度 | 各学校等 | 理論研究 授業研究 | どの教科にも共 通する教育の視 点の必要性 |
| 4 | 先輩の先 生の誘い | 無記述 | 15人 技家研究会 | 思う | 年2回 | 80% | 平日昼・夕 | S60年度～ | 主催校 | 無記述 | 研究の進め方・ 授業の工夫 |
| 5 | 勧誘 | 研究・教 師同士の つながり | 20人 北九州 市内の家庭科 教員 | 思う | 年4・5 回 | 80% | 平日昼 | H10～19年度 | 中学校 | さまざま | 同教科の教師同 士のつながりが 出来た・教材研 究や指導の向上 となった |
| 6 | 先輩教師 からの勧 誘 | 資質の向 上 | 10人 家庭科の教師 | 思う | 月1回 | 70% | 休日 | S58年度～ | 組合の支部 | 授業研究 | 新任だったので、 頼もしい相談相 手だった |
| 7 | 大学先生・ 先輩のす すめ | 情報が得 られるか ら | 20人 同じ 大学卒業生の 集まり | 思う | 年1～2 回 | 90% | 休日 | H5年～ | 公共施設の 会議室や調 理室 | 実践の交流・ 講習会 | 授業の参考とな ることを知っ た。相談・アドバ イスが出来た |
| 8 | 先輩に誘 われた | 初任で不 安だった から | 20人 月1回 | 無記述 | 月1回 | 80% | 平日夕方 | 1990年度 | 公民館 | 学級経営に 関すること | 管理職が行なっ ているようなサー クルだったので なじめず |
| 9 | 先輩の先 生方に誘 われて | 日々の授 業と楽し くするた めに | 7人 附属の先生方 | 思う | 月1回 | 100% | 平日夕方 | H3～13 | ある先生の お宅 | 授業の構想 を話し合っ た | 無記述 |
| 10 | 友人の誘 い | 知識を深 めたかっ たから | 20人 小中学校の先 生 | 思う | 月1回 | 20% | 休日 | H21年度～ | 様々 | 女性の自立 や平等・ジェ ンダーフリー | 相談できる仲間・ 物の見方 |
| 11 | 近隣学校 の教員皆 参加 | 同上 | 多数 技家研 | 思う | 月1回 | 90% | 平日昼 | S61年度～ | 筑豊地区・ 県 | 新指導要領 について | 一人教科として 有意義 |

表 8. 家庭科授業の相談相手

| 相談相手 | 割 合 |
|----------|-------------|
| 他学校の教員 | 86.0% (31人) |
| 同じ学校の教員 | 33.3% (12人) |
| 大学の友人 | 22.2% (8人) |
| 家族 | 22.2% (8人) |
| 勤務校上司 | 5.6% (2人) |
| 勤務校以外の上司 | 5.6% (2人) |
| 指導主事 | 2.8% (1人) |
| 大学恩師 | 2.8% (1人) |

最も多いのは他学校の教員であり、自由記述から他学校の家庭科の教員である場合が多いことが分かった。これは、家庭科教員が学校に一人であ

る場合が多いということを示していると考えられる。また、若い教員は、大学の友人や大学恩師に相談することが多く、年齢が上がるにつれて上司に相談するようになる傾向があった。

(8) 授業作りの情報源について

家庭科の授業を行なうための知識や情報で授業作りに大きく影響を与えられると思われる主な情報源について3つ選んでもらった。

表 9. 授業作りの情報源

| | | |
|---------------------------------|------------|-------------|
| フ ォ ー マ ル | 研究授業の参観 | 31.3% (15人) |
| | 校外研修 | 10.4% (5人) |
| | 大学での勉強 | 4.2% (2人) |
| イ ン フ ォ ー マ ル | 他の家庭科教員 | 58.3% (28人) |
| | 職場の同僚 | 8.3% (4人) |
| | サークル活動 | 4.2% (2人) |
| 自 助 努 力 | 書籍 | 64.6% (31人) |
| | インターネット | 52.1% (25人) |
| | TV | 22.9% (11人) |
| | 新聞 | 12.5% (6人) |
| | 教科書会社からの情報 | 2.2% (1人) |
| | 教材会社 | 2.2% (1人) |

半数以上の教員が、書籍、他の家庭科教員、インターネットを参考にしていることが明らかになった。これらは、インフォーマルな研修と自助努力である。フォーマルな研修では、研究授業の参観が31.3%、校外研修が10.4%でありインフォーマルな研修や自助努力で得た情報の方が授業作りに大きく影響していることがわかった。

(9) 授業スキルアップの努力

「授業のスキルアップのためにどのような努力をしていますか。また、今までしてきましたか。」という問いに対して、自由記述にて答えてもらった結果、主に「書籍を読む」(14人)、「研修会の参加」(11人)、「教員との情報交換」(9人)の3つがあげられ、努力としての認識が高いことが分かった。研修会の参加など、フォーマルな研修を努力と感じている教員が多いことも分かった。「校務のため、研修会や公開授業の参観に行くことができない」との記述も見られ、フォーマルな研修とはいえ、学校の状況などによっては参加できないことが多くあるため、参加することだけでも努力と感じていると考えられる。インフォーマルな研修では「教員との情報交換」が最も多く、日常的に行われる学校内外での交流、情報交換が不可欠なものになっていると考える。

IV. まとめ及び今後の課題

本研究では、中学校家庭科教員のフォーマル・インフォーマルな研修が授業力形成に及ぼす影響について研究を行った。

フォーマルな研修については、年齢や立場、学校の状況によって参加の有無が制限されることが明らかになった。また、研修会の出席だけでなく、組織的校内研修の出席、地区研修会の出席が行動・

意欲得点を高める要因としての関連が見られた。

授業について思考する際、インフォーマルな関係である他の教員と生徒の影響が大きいことが明らかになった。他の教員の中でも特に家庭科教員から得た情報を授業づくりに生かしていた。また、家庭生活からも影響を受けていた。このことから、授業実践はインフォーマルな研修から得た情報を基に作られていると言える。多くの教員との交流を持つことが授業力形成に影響を及ぼしていると考えられる。

インフォーマルな研修であるサークル活動では、授業だけでなく、教師のあり方を学ぶ教員もおり、サークル活動の経験のある教員は、そうでない教員よりも、フォーマル・インフォーマルな研修に参加している割合が高いことが明らかになった。

これらのことから、力量形成のための教師の個人的努力として、他の教員との積極的な交流を持つこと、サークル活動を持つ機会を大切にすることを期待する。また、職場組織には、教員が互いの授業作りに影響し合っているという自覚を持ち、仲間意識を持つことが有効であると考えられる。

今後はインフォーマルな研修と授業力形成の関係をさらに明らかにしていく必要がある。研修に対する意欲の高まりはインフォーマルな研修、特にサークル活動によってどのように変化するのか。どのようにしてインフォーマルな研修を多く行なうようになるのか。サークル活動ではそのきっかけは勧誘が主であるが、その詳しい状況を解明し教員の力量を高めるインフォーマルな研修の条件を導き出したい。

また、授業力に影響を及ぼすインフォーマルな研修の事例を集め、インフォーマルな研修の中でもどのような研修の内容や助言が、教師のどのような力量に影響を及ぼすのかを明らかにしたい。

引用・参考文献

- 1) 山崎準二、『教師のライフコース研究』, 創風社, 2002
- 2) 田中耕治、『よくわかる授業論』, ミネルヴァ書房, 2007
- 3) 奈良女子大学附属図書館奈良女子大学所蔵資料電子画像集『雑誌学習研究』
<http://www.lib.nara-wu.ac.jp/nwugdb/z002/>
- 4) 富久國夫、『教師の力量形成を支援する校長の児童助言機能の研究』, 風間書房, 2008
- 5) 岸本幸次郎・久高喜行編、『教師の力量形成』ぎょうせい, 1986
- 6) 中澤かずめ、『経験に依する裁縫学習指導法』,

東洋図書, 1931

- 7) 木下竹次, 『学習原論』, 明治図書出版, 1981
- 8) 奈良女子大学文学部附属小学校, 『わが校五十年の教育』, 奈良女子大学文学部附属小学校, 1962
- 9) 日本教師教育学会編, 『教師として生きる－教師の力量形成とその支援を考える』, 学分社, 2002

